

子どもの意欲、主体性を育む保育内容とは 幼児の自発的な遊びを通して

伊藤 祐子

The Contents of Childcare for the Development of Children's Willingness
and Independence: Spontaneous Play of Infants

Yuko ITO

キーワード：生きる力 生活科 遊び 環境を通しての保育

1. はじめに

1989(平成元)年、小学校学習指導要領の改訂により、「生活科」が誕生した。遊びを通しての総合的な指導の幼児教育と、学習を中心とする小学校教育との段差を解消する取り組みを始めた。1998(平成10)年の幼稚園教育要領の改訂では、「小1プロブレム」が問題になり、幼稚園では、小学校以降の生活や学習の基盤を培うことが示され、2008(平成20)年の幼稚園教育要領の改訂では、小学校教員との意見交換や研修で職員間の交流を図り、相互理解や交流を進めることが示されている。また、保育所保育指針においても小学校教員との意見交換、保育要録の小学校への送付義務を示している。小学校生活科でも第1学年入学当初のカリキュラムを「スタートカリキュラム」として改善することとしている。また、2010(平成22)年文部科学省調査研究協力者会議報告「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のあり方について」の中では、「接続の教育」を意識し、「学びの芽生え」から「自覚的な学び」への円滑な移行を図ることが提言の一つになっている。2017(平成29)年3月には、幼児教育の充実の視点を共通にし「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂告示された。

2. 課題と目的

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」は平成

29年3月に改訂され、平成30年4月1日から施行される。この改訂では、「生きる力」の基礎を育むために3つの柱と、「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」を明確にしている。この10の姿は、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園(以下就学前施設という)等の就学前施設で完成することではなく、乳児から幼児、そしてその先の小学校へとつながり伸びていくものと捉えられている。就学前施設での教育及び保育は、子どもの健全な心身の発達を図り、生涯にわたる人間形成・人格形成の基礎を培う重要なものであり、就学前の教育・保育は、乳幼児期の発達の特性を踏まえ遊びを通して総合的に行われるとされている。教科学習中心の小学校への学びへ無理のないようにスムーズな移行、接続を可能にするため、就学前施設の教育・保育と生活科教育について連続性を考慮した保育内容について理解を深めていきたい。

2008(平成20)年学習指導要領において、生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」とある。この生活科の目標は5つの要点によって構成されている。①具体的な活動や体験を通して ②自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち ③自分自身や自分の生活について考えさせるとともに

④生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ ⑤自立への基礎を養う。5つを要約すると、自然と直接関わる活動や体験、経験を通して子どもの自立する基礎を培うことが生活科の目標として示されており、学習指導要領の目標である「生きる力」を育むことが求められている。「生きる力」とは、変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知・徳・体をバランスよく良く育てること。「確かな学力」とは、基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力。「豊かな人間性」とは、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性。「健康・体力」とは、たくましく生きるための健康や体力。

幼稚園教育の基本は、幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの。保育所保育の目標は、生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期の保育は望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うこと。と示されている。今回の平成29年改訂の新幼稚園教育要領での主な改善事項では、幼稚園教育において育みたい資質・能力(「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」)を明確にし、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の具体的な姿(「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」)を明確にしている。保育所保育においては、幼児教育の積極的な位置づけとして、「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」として示されている。幼稚園教育の基本は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本としている。幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育にお

ける見方・考え方を生かし、幼児と共により良い教育環境を創造するように努めなければならない。就学前施設における経験や学びが小学校での生活へと少しの段差でいかにスムーズに乗り越え、小学校での学習意欲を高める事ができるのか、就学前施設での遊びと小学校の生活科の内容についてのつながりを考える。

2. 就学前施設の教育・保育と小学校教育との円滑な接続

2015(平成27)年度より「子ども・子育て支援新制度」がスタートした。国は、「子ども・子育て支援の意義」のポイント(基本方針)を示している。その中で、○「子どもの最善の利益」が実現される社会を目指す。○子どもや子育て家庭の置かれた状況や地域の実情を踏まえ、幼児期の学校教育・保育、地域における多様な子ども・子育て支援の量的拡充と質的改善を図ることが必要。その際、妊娠・出産期からの切れ目のない支援を行っていくことに留意することが重要。○社会のあらゆる分野における全ての構成員が、子ども・子育て支援の重要性に対する関心や理解を深め、各々が協働し、それぞれの役割を果たすことが必要。とある。このようにすべての子どもを対象とする新制度では、就学前の教育・保育は、幼稚園、保育所、認定こども園、小規模保育所、家庭的保育等が用意されており、利用者である保護者の選択の幅も広がっている。就学前の教育・保育の場がどこであろうと、多様な経験と学びが小学校での生活と学びへつながるようにしなければならない。待機児童解消などに向けて保育施設等の量的拡大と共に質的改善が求められており、2009(平成21)年施行の保育所保育指針は、初めての告示となったことから幼稚園教育要領との整合性がより強く図られている。小学校への円滑な接続に関しては共通課題として検討された。2015(平成27)年度施行の子ども・子育て支援新制度では、認定こども園教育・保育要領でも小学校との円滑な接続が基本的考えの中に含まれている。小学校との連携では以下のように示されている。幼稚園教育要領〈第3章第1一般的な留意事項(9)〉幼稚園においては、幼

子どもの意欲、主体性を育む保育内容とは

稚園教育が小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。〈2. 特に留意する事項 (5)〉 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。保育所保育指針〈第4章 (3) 指導計画作成上特に留意すべき事項エ小学校との連携〉(ア) 子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解など小学校との積極的な連携を図るように配慮すること。(イ) 子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校に送付されるようにすること。幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈第3章第2特に留意すべき事項10〉 園児の発達や学びの連続性を確保する観点から、小学校教育への円滑な接続に向けた教育及び保育の内容の工夫を図るとともに、幼保連携型認定こども園の園児と小学校の児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を通じた質の向上を図ること。とされている。いずれも小学校との連携を重要なこととしている。

就学前施設の幼児と小学校の児童での交流や保育者と教員の情報共有など行われているところも多いと思われる。実際にはどのような交流をしているのか。例① 小学校の企画である「お店屋さんごっこ」に保育所の年長児が招待され、お店屋さんの企画の一つであるゲームに小学生に交って参加したことで小学生の優しさや丁寧な関わりに対してとても嬉しく感じた保育所の子ども達。「お兄さんたち優しかった」「学校は楽しかった」と小学校入学に対して期待している言葉が聞かれた。例② 小学校の教員が保育所の子どもたちの保育を体験するために一日保育実践を経験され、「こんなに細かいとこ

ろまで気を配り保育が展開されていることに驚いた」という感想をいただいたことがある。小学校教員は幼稚園や保育所での実際の子どもの状況を見る機会も少ないと思われる。幼稚園や保育所の保育者は、卒園して小学校に入学した子どもがどのような小学校生活を送っているのかとても気になることである。小学校教員と就学前施設の保育者との交流や情報共有の機会が多く必要。例③ 小学校の年度当初の授業参観の時に保護者と共に保育者が子ども様子を参観している保育所もある。保育所での生活が小学校での学びにつながっていることを確認できるということだ。(基本的生活習慣が自立している、自分の思いや考えを言葉で表現できる等) 幼稚園や保育所等の就学前施設での生活や遊びの様々な経験の中から子どもは多くの学びを積み重ね、身に付けている。

幼稚園教育要領〈幼稚園教育の基本2〉 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。保育所保育指針では、〈第1章総則 (3) 保育の方法オ〉 子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にする。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈第1章総則1 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本 (3)〉 乳幼児期における自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。と明示されている。就学前施設では、保育の内容は「遊びを通して総合的に展開される」「環境を通して行うもの」を教育・保育の基本としている。保育を展開するうえでは、「遊び」はもっとも重要な保育内容である。幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領からも、遊びは自発的な活動であるということが理解できる。また、

子どもが自発的、意欲的の関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にする。いつも子どもと共に生活している保育者は、子どもの遊びにおいては重要な人的環境になる。

現在では、子どもの発達において「遊び」本来の体験の不足だと言われている。「○○あそび」との名称で言われていても、その遊びから解放されたように子どもは、「先生、遊んでもいい!」と言う言葉が聞かれる。「いま○○あそび」していたのだが、子どもにとっては、魅力的ではなく、興味がないものであり、子どもの主体的な遊びではなかったのかと思われる。子どもの意欲や自発性がない遊びは、子どもにとっては「遊び」ではない。就学前施設での年長児などは、子どもの発達の特徴からドッチボールやごっこ遊び等、グループでの遊びを好み、自主的に遊びを展開できるようになり、みんなで一緒に遊ぶことの楽しさを体験する。グループで遊ぶことは、自分だけではなく仲間の思いを聞きながら、どのようにすれば良いのかを一緒に考え、方法を導き出している。子どもは多くの遊びや生活から他の人と協調したり、自分が我慢したりという経験を重ねている。ドッチボール等の勝敗が決まる遊びは、どのようにしたら勝てるのかみんなで考え、作戦を立てる。子どもの中ではチーム決めの時からドッチボールは始まっていて、2人組になる相手を真剣に選び、ジャンケンしてチームを決める。勝敗の結果により、次に勝つためにはどうしたら良いかと、手段や作戦を考えている。このように興味のある遊びでは、自分たちで考え遊びを経験していくことで子どもの主体性や周りの人に対する関わり方などを身に付けている。

また、身近な素材を使って工夫して製作することが大好きな子どももいる。以前、小さな菓子や石鹼の空箱を使って毎日のように「くるま」の製作をしていた年長の子どもがいた。身近にあるストロー、タイヤにする円形の紙、セロテープを使って製作をする。出来上がると動かしてみる。スムーズに走ることは最初からはできずにいた。タイヤが外れてしまったり、回らなかったりした。上手くできるまで何度も試して、よ

うやくスムーズに「走るくるま」が完成した。その時は、とても満足な顔をしていた。それで終わることはなく、次は連結を考え、何でつないだら上手く走るか工夫を重ねていた。人的環境である保育者が身近な素材である空き箱等を使って製作をしている姿を近くで見ている子どもは、自分から意欲的にそして自発的に工夫しながら製作をし、自分の思いが達成できるまで何度も試行錯誤を繰り返し遊べるおもちゃを作り上げる。自分の考えているような作品が出来上がった時は、満足感、充実感に溢れている。また、いろいろな素材の中から自分で選択することができるよう多様な素材を準備するのも保育者の役割でもある。子どもにとって興味や関心が高まる適切な環境が用意されていると遊びは広がり、深まり、夢中になって遊ぶ事ができる。子どもが「おもしろそう、楽しそう」と思い、手にとり試してみようという環境がなければ、「やってみたい」という気持ちにはならない。保育者は子どもの発達や興味、関心を見極め遊びのリーダーとなり、遊びを提供する必要がある。また、子どもは身体全体を使った遊びを経験することで、身体を動かすことはもちろん、遊びのルール、遊ぶ時の約束があることに気づき、それらを守り仲間と一緒に遊ぶことを通して社会性の育ちにもつながる。子ども同士で夢中になり群れて遊ぶ経験が少ないため、コミュニケーション力が弱くなっているとも言われている。コミュニケーションの手段である、言葉による伝え合いが上手くできず、会話が成立せず一方通行になる。自分の思いを上手く言葉で表現し、相手にも思いや気持ちがあることに気づくことができれば、相手に対して思いやりを持ち、お互いが調整する力、折り合いをつける力が身に付いていくと思われる。就学前施設での保育者の役割は、コミュニケーション手段としての言葉のやりとりでは、子どもの気持ちを聴き取り代弁する力が求められる。そのため、子どもと共に生活し遊ぶ中から、一人一人の発達、子どもの気持ちや思いを理解しようとする努力を怠ってはならない。人的環境の一人である保育者も自分のことだけではなく、相手のことを考えられる人でなければならない。

子どもの意欲、主体性を育む保育内容とは

い。学生が実習に行き、トラブルの仲裁が難しいと感じるようだ。子どもとの信頼関係、子どもの発達、個性、体調など実習生の立場で全てを理解するのは難しいが、目の前の子どもの状況をよく把握し、子どもの気持ちを理解しようと努力することでトラブル対応はできると思われる。年齢が小さい子どもは、そばにいる大人がお互いの気持ちを代弁することで、相手の気持ちが理解できるようになる。このような経験を積み重ね、就学の年齢になると子ども同士でトラブルを解決することができるようになり、人としての大きな成長につながる。自分だけではなく相手がいることを理解し、相手の気持ちや考えを聞いたり、自分の思いを伝え、お互いの調整や折り合いをつけることを様々な場面で経験していくことができるようにしていく必要がある。コミュニケーション力は、幼児期の様々なさまを経験を通して学び身についていく。保育所の子どもたちと地域の公園に散歩に出かけた時、砂場では地域の親子が砂遊びをしていたのだが、保育所の子どもが、地域の子も持ってきていたままごと道具を「かして!」と言い使い始めた。自分(保育所)の物のような態度で遊んでいたことがある。保育所であれば、「かして」「いいよ」の会話は成立しているのだが、地域の子もであったため「いいよ」の返事がなかった。この事例は保育所以外の場所で地域の子と一緒遊ぶ経験はあまりなく、どのように接したら良いかもわからず、自分が欲しいままごと道具であったため「いいよ」の返事を待たずに遊んでしまったのだと考えられる。いろいろの場所でいろいろな仲間と遊ぶ機会が少なく、一緒に調整しながら遊ぶことの楽しさや大変さを体験することが少なくなっている。子どもの発達に必要なのは、同じ世代の子どもたちと遊ぶ経験であり、遊びの経験を通して、子ども社会での学びにつながると考えられる。

保育所保育指針第3章保育の内容には「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域並びに「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容は子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものであると示されている。また、第3章2

保育実施上の配慮事項(4)3歳以上児の保育に関わる配慮事項イでは、子どもが十分に自己を発揮し遊びを楽しんだり、自分の力でやり遂げる経験を重ねていくことで子どもの満足感や充実感と自信を高め、自分を大切にしようとする。それは、友達や周囲の人たちを大切にしようという気持ちにつながるとある。

乳幼児期の子どもの育ちの特徴として、様々なことを直接的に経験することを通して多くのことを身に付ける時期である。就学前施設で生活している子どもたちが様々な経験から多くのことを身に付けていくことで、スムーズに小学校生活になじみ、学習への意欲を持ち学びにつながるための環境を用意することが必要になる。人的環境としての保育者は、子どもの良い見本を示さなければならない。子どもは「見本」を見てまねて育つ。保育者の歩き方、口調など特徴を捉えている。子どもは保育者の真似をすることで、「先生みたい」という気持ちになり、その気持ちがうれしい。子どもは保育者をモデルにしている。これから保育者をめざしている若い世代の方たちも子どもの良い「見本」になるよう、感性や人間性を磨くことが必要である。子ども時代に仲間と思い切り遊びワクワクドキドキの経験が少ないのだろうか。これから保育者を目指している者は、人と関わりながら遊ぶことの楽しさをたくさん経験することが必要であり、遊ぶことの楽しさをより多く体験し、子どもたちにその楽しさを伝え、遊びの文化を次代に継承していく役割も求められる。

就学前施設の教育・保育は、子どもの意欲をいかに引き出し、子どもが主体性を持って生活し、遊ぶことができるような環境を用意するかが大きな課題ではないかと考える。そのためには、声かけ、働きかけや援助、準備すること等全て大人がするのではなく、子ども一人一人に合わせ、保育者は子どもと共に考え、試したりを繰り返すことで、子どもが主体性を持って生活できるような関わりが必要なる。子どもが自分で気づき、疑問を感じ、試行錯誤して様々なことに積極的に関わられるようにすることが幼児期の教育・保育で大切な保育者の役割だと考える。

3. まとめ

子どもが自ら考え主体的に行動できる人を育てなければならない。人間形成には社会性、思いやり、忍耐力、持久力、柔軟性など目に見えない心(非認知能力)を育てることが重要だと言われている。非認知能力を養うことで将来の人間形成の基礎が育つ。いつも子どもの側にいて生活している大人(保育者・親)の役割は大きい。特に就学前施設では、いつも子どもの側にいる保育者の役割はとても重要である。子どもの柔軟な考えを認められる、保障できる時間の余裕を持ちたい。子どもの生活時間を見通した関わりができることで、子どもは安心していろいろなことに挑戦し、失敗し、また挑戦することを繰り返し、生活に必要なことを身に付けることができる。

子ども・子育て支援新制度の実施により、子どもの生活と発達との連続性を配慮した教育・保育の実現が求められており、幼保小の連携と円滑な接続は、就学前の教育・保育の充実と小学校教育との相互理解が基盤になる。生活科教育が就学前施設と小学校教育とのかけはしとなり、就学前の教育・保育が小学校教育先取りにならないよう「遊び」を通して様々な経験や学びが人間形成の基礎として培われ、その基礎をもとに小学校での学びが広がり深まっていけるようにしていくことが必要である。そのためのスタートプログラムは、就学前施設での幼児期の特徴から遊びを通して多くの経験や体験を通して身に付けた学びがスムーズに小学校での生活や教育に生かされるよう、就学前施設の保育者と小学校教員がお互いの子どもの育ちを十分に把握し、理解していくことが重要な課題である。そのためには、就学前施設と小学校で十分な情報共有を行い、お互いの理解のもとに進めていけるようにしたい。就学前施設の保育者は、児童期の子どもの小学校での生活や学習に向かう姿勢などを理解すること。また、小学校教員は、就学前施設での子どもの生活や遊びの状況について理解していく必要がある。生活科の目標の一つである、具体的な体験の中で、子どもが直接働きかける活動(見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶ)等を通して生活上

必要な習慣や態度を身に付け、身近な社会、自然、文化を学ぶと示されているように、児童期の発達の特徴である経験することを通して学ぶこと、子どもが身近な環境に直接働きかける活動や体験を通すことが基本となる。幼児期の子どもの保育の基本である環境通しての保育と接続させ、幼児期の子どもの姿を十分に把握、理解することで、就学前施設から小学校へ入学する際には、小さな段差でスムーズに乗り越えられるのではないかと考えられる。

小学校学習指導要領では、子どもの興味や関心に沿って直接働きかける学習活動が「生活科」でできるように授業内容を構成し、そこでの経験を生かし、表現、言語活動につなげ、グループで話し合ったり、発表したりということをする。また、他教科との合科的授業も考慮し、進めていくことが生活の目標に示されている。小学校児童の発達は、直接経験を通して学ぶという幼児期の発達の特徴と連続性があることを考慮し、活動を展開しながら児童期の学習へとつなげながら授業が行われている。2018(平成30)年度から幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領の改訂施行となり、3歳以上児の教育が共通化される。幼児期の教育は、幼児期の子どもの特性から遊びや生活の中で、感性豊かに、美しさや良さを感じ取り、不思議さに気づき、試したり、工夫していくことを通して育みたい資質・能力を育てていく。教育内容として「幼児期の終わりまでに育ってほしい10姿」を具体的に示している。このことから就学前施設の保育者と小学校教員の5歳児修了時の子どもの姿が共有化され、幼児教育と小学校教育の接続が円滑に行われることになる。そして、生活科の授業が幼児期に培った基本的な力を受け止められながら、児童期の学習へとスムーズに接続していくことで小学校での生活が充実し学習意欲が高まっていくと考えられる。

子どもの意欲、主体性を育む保育内容とは

参考文献

- 小学校学習指導要領解説「生活科」
文部科学省
- 保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領
全国保育士会
- 保育者のための「生活」 大学図書出版
咲間まり子・増田まゆみ編著